

2009年8月、私は14年ぶりにドイツのフライブルク市を訪れた。「フライブルクは今でも環境先進都市なのか？」という問いに対して、自分なりに解答を得たかったからである。

1995年当時のフライブルク市は、確かに先駆的な試みを官学民挙げて実践していたのは事実で、フライブルク大学のブラウンホーファー物理学研究所が世界で初めて市内に建築したソーラー・アルタルキーハウス(太陽エネルギーのみの住宅)を、感動しながら見学していたのを今でも覚えている。この施設は設備内容の充実を図りながら外観を少し変え、現在までその機能を維持させているが、今回の見学では当時のような新鮮さをあまり感じることはなかった。まるで、フライブルク市内の施設がそのような最先端技術を導入する段階を終え、それを生かすための“エコロジー思想”が市民に広く浸透していく次の段階、すなわち成熟化社会に突入したような感覚をおぼえた。

再生可能エネルギーの最新技術を取り入れた先進的環境施設が14年前とあまり変わっていない点を考えれば、フライブルク市は決して先進都市にはあたらない。しかし、市民や大学、行政がそれぞれの施設を充実させ、当時の設置理念を今日まで維持している現実を考慮するならば、先進都市としての評価を与えることができる。すなわち、“先進”性を先進的施設という最先端の建造物や景観の有無だけでとらえるのか、あるいはそこに成熟化という目に映らない成果を付加させるかによって自ずと評価は異なる。私は、後者の2面性を一つにする考え方が環境都市の“先進”性を判断する重要な要素と考えている。

このような視点でみると、今日のフライブルク市は「環境先進都市」ではなく「環境成熟都市」といえる。しかし、今でも「環境先進都市」として期待し、訪れる日本人が多いのも事実である。フライブルク市は世界最先端の環境技術を活かした都市づくりを今もしているのではないかと、という錯覚を抱いている人が少なくないからである。むしろ、フライブルク市は「エコロジー住宅」に見られるような脱近代化要素を活かした「省エネ推進都市」だと考えることもできる。“先進”的環境都市は、最先端技術の有無だけの判断ではなく、成熟化とのバランスのなかで判断されるべきだと考えるのである。

今年の2月中旬、奈良県生駒市のスーパー「ディアーズコープいこま」に廃プラ6種を自動分別する機械が設置された。この機械は一般家庭から廃棄されるプラスチックを6種類に自動分別する装置で、ペットボトルや食品トレー以外のプラスチック資源のさらなる有効利用を図るために考案された。研究開発したのは制御機器メーカーのIDECや大阪大学、三菱電機エンジニアリングで、レーザー照射によって素材を即座に判別し、ロボットアームがそれぞれの廃プラ素材を個々の回収容器に分別するシステムである。不純物が混入しない廃プラ素材の分別は、地方自治体や容器包装リサイクル協会にとっても、実用化が待ち遠しい機械であろう。この装置はまだ実験段階だが、開発が進めば、人間による分別の手間を省くことができる“優れもの”になるかもしれない。そんな可能性を秘めた機械である。

昨年、フライブルク市を訪れたさい著名な環境ジャーナリストで翻訳家の村上敦氏と会い、ドイツの環境問題について話を聞いた。

フライブルク市では「生ごみ」「紙」「容器包装」「リサイクル瓶」「その他(焼却ごみなど)」の五つに分けられ、ライプツィヒ市では近々「生ごみ」と「その他」の二つに分別されるという。



民家の玄関前に置かれたごみ回収コンテナ。
2009年8月20日、フライブルク市内にて。

日本人ひとりが1日あたりに廃棄するごみの量は1.10kgで、ドイツ人の0.87kgと比べて多い(約1.26倍)。日本では水俣市のようにごみを20品目以上に分けて回収しようとする市町村があり、可能なかぎり細分別化を図ろうと努力している。ところがドイツではライプツィヒ市のように、分別をいかに少なくするかが求められている。

それは、生ごみ以外のものを全て機械で自動選別させようというもので、機械分別の精度が高まっていることがその背景にある。人間よりも機械でごみを分別の方がコスト的に安く抑えられるという現実的な側面もある。ただこの2分別化が果たしてうまく機能するかどうかは、不明である。いずれにおいても、日本ではごみ分別はどこまで細分別化できるかであり、ドイツではその逆だということである。

今年の2月中旬、2004年にノーベル平和賞を受賞したケニアのワンガリ・マータイ氏が、京都府などが創設した「KYOTO地球環境の殿堂」入りを記念した表彰式に出席するため、来日した。彼女が初めて来日したのは平和賞を受賞した翌年の2月で、毎日新聞社から招聘された時だった。その時、彼女は日本人が文化として残してきた「もったいない」の言葉とその意味を初めて知り、環境問題を解決するさいの重要な概念だと悟った。その後、マータイ氏は国連女性地位委員会に出席したさいも全員に『MOTTAINAI』(もったいない)を唱わせたりするなど、この言葉の意味と実践を広める運動を世界で展開していた。これら諸活動の成果が、「KYOTO地球環境の殿堂」入りを促したのである。

日本人の「もったいない」や「ものを大切に」という言葉は、必ずしも「経済的コスト」と連動するものではない。本来は、値段が高いからもったいなく思い、そして大切に扱うということではなかったはずである。値段に関係なく「もの」そのものをもったいなく思い、大切にしようとしてきたはずである。それが近年になると、コストで物の価値をはかろうとしている。

ライプツィヒ市のごみの2分別化は経済コストの観点の色濃く反映されているのではないだろうか。それまで培われてきた分別意識や環境保護意識よりも経済コストを優先させるこの方向性は、決して「環境成熟都市」の政策とはいえない。もちろんコスト面も考慮しなければならないことは前提だが、要はバランスの問題ではないかと思う。